

関わり続ける定住のカタチの実践による 「結の故郷」づくりに向けた基礎的研究

報告書

令和6年3月

関西大学環境都市工学部

研究内容

- ・ 今後のまちづくりに関わる高校生等の学生を中心に市民意識の醸成に関する実践的活動
- ・ 地元住民や団体との協働による横町スタジオの環境整備及びエリアマネジメント活動の実施
- ・ 横町スタジオを活用した大野市における関係人口創出に向けた取組みの実施

目次

第1章 序論.....	1
(1) 研究の背景	1
(2) 研究の目的	1
第2章 既存研究と本研究の位置づけ, 本研究の流れ	2
(1) 既存研究	2
1) 本研究での各要素の定義	2
2) 本研究での各要素とらえ方	3
(2) 本研究の位置づけ	4
(3) 本研究の流れ	5
1) アンケート概要	6
2) アンケートの質問内容	7
3) 受動的, 能動的アプローチ, 比較分析について	8
第3章 受動的アプローチによる地域愛着醸成分析	10
(1) 現段階の住み予定の集計結果	10
(2) 自然接触と地域愛着の関係	11
1) 単純集計(クロス集計)	11
2) 数量化 I 類	12
3) 共分散構造分析	13
(3) 地域愛着と定住意識の関係	13
1) 単純集計(クロス集計)	14
2) 数量化 I 類	15
3) 共分散構造分析	15
(4) 自然接触と地域愛着, 定住意識の関係	16

第4章 能動的アプローチによる地域愛着醸成分析	18
(1) 現段階の住み予定の集計結果	18
(2) 自然接触と地域愛着の関係	19
1) 単純集計(クロス集計)	19
2) 数量化 I 類	20
3) 共分散構造分析	21
(3) 地域愛着と定住意識の関係	21
1) 単純集計(クロス集計)	21
2) 数量化 I 類	23
3) 共分散構造分析	23
(4) 自然接触と地域愛着, 定住意識の関係	24
第5章 受動的・能動的アプローチによる地域愛着醸成分析の比較考察	26
(1) 自然接触と地域愛着, 定住意識間の影響度の比較	26
(2) まとめ	27
第6章 おわりに	29
(1) 本研究のまとめ	29
(2) 今後の研究への展望	29
(3) 提案	30

第1章 序論

(1) 研究の背景

令和2年の国勢調査によれば、日本の人口の3割を東京圏(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県)で占めていること¹⁾から、都市部への一極集中が顕著であり、それに伴って、地方部の若年層を中心とした人口流出が増加している。また、全国的にも人口は減少傾向にあり、現段階も各地で人口が減少していることから、地方都市の人口を増加させる政策の実現はかなり困難であると言わざるをえない。この問題に対して、長期的な視点から若者の担い手育成や人口減少が招く問題を防ぐために、例えば総務省は、今後の魅力あふれる地域形成を目指して、「定住自立圏構想」を打ち出している²⁾。地方では、希望する大学や就職先の選択に制約があることから、大学への進学や就職を機に他地域に転出する若者層が多く、その後Uターンしないことが課題として挙げられる。また、各自治体では定住意識を踏まえた市民意識に関する調査を行い、総合計画に反映している動きや、本研究の対象地である福井県大野市においても地方創生、人口減少対策への取り組みとして若い世代を対象とした「大野へかえろう」プロジェクト³⁾などを実施しており、若者をはじめ定住意識を促進する重要性は、現段階でも必要とされていると考えられる。その中で既存研究や自治体の報告書から、定住志向や地元回帰の要因として、「実家があること」や「仕事環境」を理由とした人がほとんどである。ただ、地元の自然環境・居住環境に魅力を感じ、住み続けたいと考えたり、年齢が高い人などが主に地元に戻ってきたいと考えたりするという結果もあることから^{4) 5)}、若者が定住意識を高めるためには、地域に強い思いを持ってもらうことも重要になると考えられる。また、今日では関係人口等のワードが出てきたことにより、外部人材の重要性も叫ばれている。

(2) 研究の目的

定住・転出前の大きな転機となる高校生には、卒業した後も地域との関わりを強める為に、高校生にとって効果的な地域に存在する地域資源との触れ合いなどの中で、高校生が地域や地元の人等への想い「地域愛着」を高め、住み続けたいなどの定住意識を醸成させることも一つ重要となると考える。また、上記のように高校生に特化した地域資源との触れ合いから地域愛着の醸成においてのモデルが少ない。さらに、具体的な地域資源との触れ合い方法などが明らかになっていない。そこで本研究の目的は2点ある。1点目は、地元から定住・転出の転機となる高校生に特化した地域愛着意識モデルを明らかにする。2点目は、大学がない市町村において有効な地域資源(自然)の接触方法や活動について明らかにすることである。

第2章 既存研究と本研究の位置づけ、本研究の流れ

(1) 既存研究

1) 本研究での各要素の定義

a) 地域愛着

Hidalgo et al⁶⁾ が定義しているものと本研究の解釈とを合わせて、「地域愛着」を「人と特定の地域をつなぐ感情的な絆や結びつきであり、心地よいものとして感じられるもの」と定義する。また、地域愛着の尺度として既存研究を参考に、それぞれ地域愛着(選好)・地域愛着(感情)・地域愛着(持続願望)と言い換えて用いる。地域愛着(選好)は個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味するものであり、地域愛着(感情)は、そうした嗜好を超えて当該地域に対して、慣れ親しんだものに深く惹かれ、離れ難く感じる程度を意味するものとする。地域愛着(持続願望)とは、嗜好や感情といった現状の地域に対する認知的、情緒的な地域への心的関与のみを意味するのではなく、地域のあり方そのものに対して“願い”を抱くという地域愛着を意味するものとする。

また、ここでいう「地域」の定義として、行政政策の基本的な範囲である基礎自治体範囲の地域とする。

b) 定住意識

武ら^{7, 8)}の研究から「定住」の狭義の定義として、同一場所に物理的に永年にわたって住み続けること、あるいは満足して、愛着性や連帯性を持ちつつ、短くないある一定の期間、継続して住むこととの表現がある。人は、環境に対して、① 定住したい、② 移動(移住)したい、③ 住み良く(するため改善)したいという対応の仕方があり、①は「住居」及び「周辺領域」である「地域」に対して 満足感を持ち、半永久的に「定住」しようとする意思を持った状態と挙げている。この武らの既存研究の定住意識に対する定義に加え、本研究では移住したとしても、地域イベントには参加する、あるいは市が災害にあったら支援したい等、地域との外部からの関わりの意識も含める。つまり、本研究の「地域」の定義に変えた上で、定住意識を広義の意味として行政政策の基本的な範囲である基礎自治体範囲と定義する「地域」に対して、満足感を持ち、半永久的に「定住」や「外部からの関係」を持ちつづけようとする意思と定義づける。そこで、この定義をもとに定住意識を定住意識(定住)と定住意識(外部関係)として、本研究では研究を進める。

2) 本研究での各要素とらえ方

a) 地域愛着のとらえ方

「地域愛着」の規定要因について、年齢や居住年数の他にも周辺環境や近隣住民との接触が地域愛着に影響を及ぼすと指摘されている。澤本の研究からも地域資源との接触は地域愛着を醸成することにつながると指摘されている⁹⁾。地域愛着については風土への接触量が大きくなるほど、比較的短期間で地域愛着(選好)が有意に高くなるものの、地域愛着(感情)や地域愛着(持続感情)は有意に変化にはしなかった。しかしながら、比較的短時間に变化しうる地域愛着(選好)が、より長期的に変化すると考えられる地域愛着(感情)や地域愛着(持続願望)に影響を及ぼす可能性があるという報告がある。

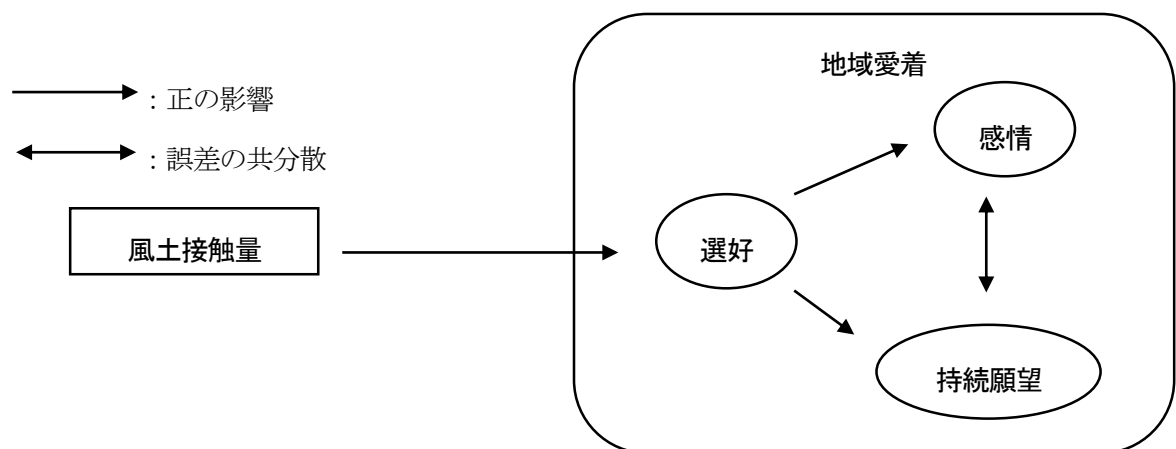


図 2-1-1 風土との接触量の変化と地域への感情の関係についての仮説

b) 定住意識のとらえ方

「定住意識」に関して、今後も住みたいという人の要因として、進学先や就職先があるかどうかの進路環境や、地元回帰に関する要因としては、実家があるからというものが大半を占めている。しかし、自然環境や居住環境等の「地元やそこに関わる人への想い」というのも、大きな要因として結果が出ている^{6, 7, 8)}。また、菊澤ら¹⁰⁾の研究論文によれば、自然環境、利便性、社会関係資本が、定住意向の規定する要因として挙げられている。ただ、それらの変数以上に「幸福度」というものが、定住意向に最も影響を与えていることが示唆されている。さらに、その「幸福度」は、健康、仕事への満足度、市民活動への参加意欲によって規定されていることがわかったことから、それらの変数が「幸福度」を介して間接的に定住意向を規定するということがいえると考えることとする。

(2) 本研究の位置づけ

地域愛着に関する研究としては、すでに多くの研究蓄積がある。鈴木ら^{11, 12)}は消費行動や利用店舗への愛着が地域愛着に与える影響を、谷口ら¹³⁾は地域観光が観光客と地元住民の地域愛着に与える影響を明らかにしている。そうした諸研究のうち、本研究と関連が深い研究として、地域資源との接触や定住意識に関するものがある。藪谷ら¹⁴⁾は地域接触と地域愛着や地域愛着と定住意識の関係性について分析を行い、高校生の通学時の地域接触において、地域の人や自然との接触が地域愛着を醸成するという因果関係を統計的に明らかにしている。また、地域愛着の醸成が定住意識の形成に重要であることを明らかにしている。したがって、「定住意識」も同じように「地域愛着」が醸成されれば、今後の地域との関係性を強める一つとして、地域に対して「住みたい」や「関わり続けたい」といった意思、外部に出たとしても関わり続けたいという意思を醸成することができるのではないかと解釈できる。ただ「定住意識」との繋がりに関しては、地域やそこに関わる人々への思いというのも規定要因として挙げられている中で、「地域愛着」という指標から高校生の「定住意識」を醸成することが本当にできるのか、その繋がりを示したデータが少ない。

また、高校生の定住意識を高めるであろう「地域愛着」を醸成するために、地域資源に触れることや市民活動の活性化が必要になることや年代、居住年数等について書かれた既存研究^{6), 15), 16)}は存在しても、高校生に着目した「地域愛着」や「定住意識」の醸成するための規定要因を示した論文も少なく、効果的な地域資源の触れ合い方でそれらを醸成できるのかを示された論文が少ない。地域資源の醸成において生活環境に応じた効果的な方法を示している論文も少ない。

そこで本研究では、地方高校生における地域資源との接触が地域愛着や定住意識の形成に与える影響について明らかにする。地域資源の中でも自然との接触に着目し、自然と触れ合える要素を以下の3つに分けた。

物事との接触要素：高校生にとって、学校や学校以外といった普段の生活で接触する一般的なことがらとして対象とする。

人との接触要素：既存研究¹⁰⁾から、地域の人や自然接触が地域愛着醸成において有効であるということが確認され、本研究でも、友人や家族、近所の人などといった「人」と接触することで新たに地域愛着への直接効果が存在すると考え、対象とする。

外部との接触要素：研究対象地である福井県大野市には市内に大学がなく就職先も十分ではないことから、自身の進路を決める際に外部の情報に触れ、メディアやネット等の評価などに着目すると考えたため、対象とする。

これらの既存研究や位置づけより以下の地域愛着意識モデルの作成を目指す。

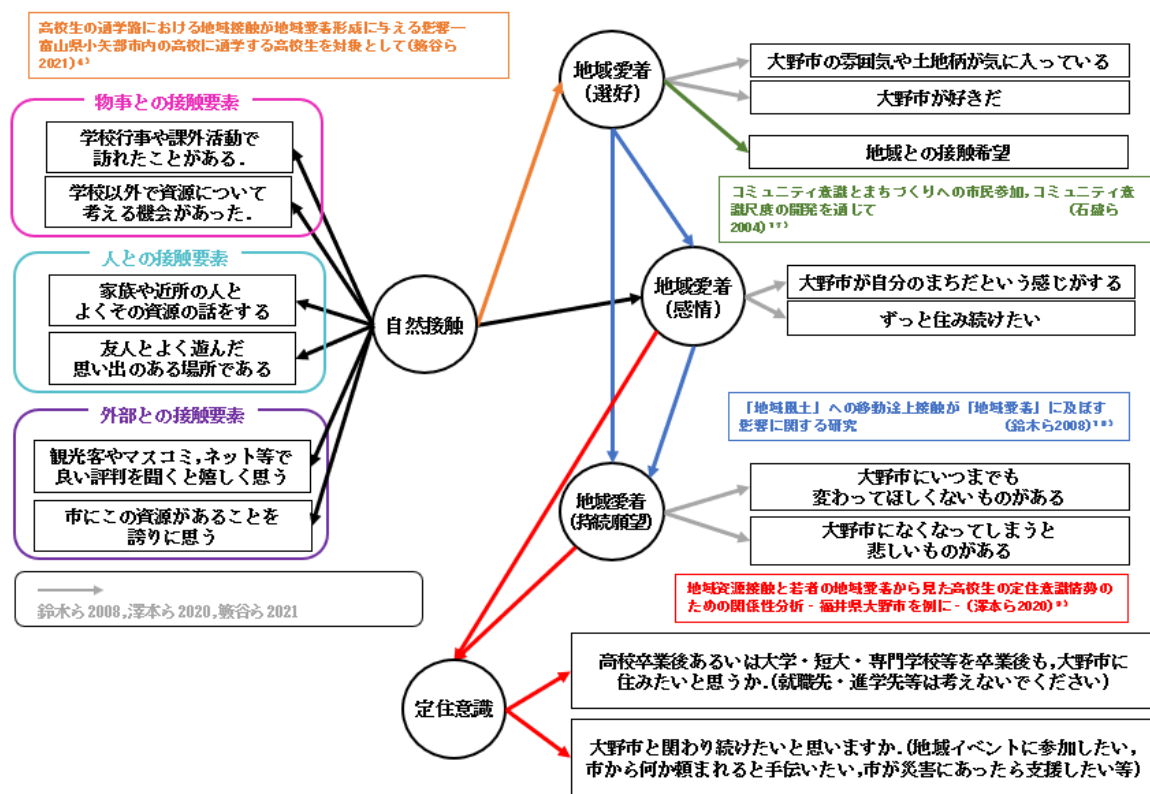
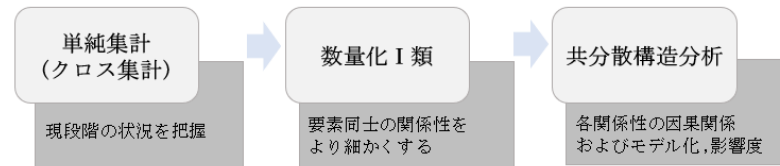


図 2-2-1 高校生に特化した地域愛着意識モデル(既存研究より)

(3) 本研究の流れ

本研究で対象とする高校生に対しアンケート調査を行い、高校生の意識に大きく影響すると思われる受動性／能動性に着目するために受動的アプローチと能動的アプローチの比較分析を行う。また、分析の流れとしては主に以下の3つを行った。①現段階の状況を把握するための基礎的な分析(単純およびクロス集計)、②要素同士の関係性をより細かく知るための数量化Ⅰ類による分析、③各要因の因果関係、モデル化および影響度について分析するための共分散構造分析である。最終的には、「自然接触と地域愛着」、「地域愛着と定住意識」、「自然接触、地域愛着、定住意識」の関係性について分析している。



各要素同士の関係性

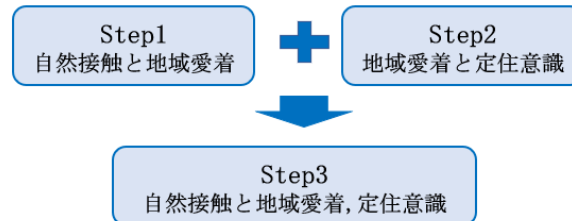


図 2-3-1 分析の流れ

1) アンケート概要

福井県立大野高等学校の高校生に対しアンケートを行った。2021 年度は担任の先生からアンケートを配布してもらい、宿題として持って帰って回答する、もしくは学校の時間の中で回答してもらう方法でアンケートを実施した。2023 年度はアンケートに回答する時間を特に設けてもらい、実施した。2021 年のアンケートの調査項目は、「基本項目」、「定住意識に関して」、「地域愛着について」、「高校生が思う地域資源について」、「わたしが未来の市長プロジェクトについて」の 5 つとしており、2023 年のアンケート調査項目は、「基本項目」、「地域資源(自然)について」、「地域愛着について」、「定住意識について」の 4 つとしている。以下に、各項目の調査内容を以下にまとめる。

① 基本項目

アンケート回答者の基本的なデータを集めるために回答を求めた。以下に示す。

2021 年度：クラス/お住まいの町目について

2023 年度：クラス/出身小学校

② 定住意識について

現段階で高校卒業後に住む予定の場所を聞き、現状を理解したうえで、地域資源接触と若者の地域愛着と定住意識の関係性を分析するために、高校卒業後や大学・短大・専門学校等卒業後も地元に住み続けたいか、最も合うもの一つを選んでもらい、定住意識に関する質問を設けた。また、本研究の定住意識の定義として「外部関係」を用いている。地域イベントには参加したい、地域や地元の友人知人または市から何か頼まれると手伝いたい、市が災害にあったら支援したいなど、外部に出たとしても関係を持ちつづけたいか否かも含めるため、「とてもそう思う」、「そう思う」、「どち

らでもない」、「そう思わない」、「全然そう思わない」の5段階で外部からの関係をもち続けたいか回答を求めた。

③地域愛着について

地域に大学がなく、地元から定住・転出の転機となる高校生が、大野市に対してどれだけ地域愛着があるのか、また、地域愛着が高校生の定住意識の醸成につながるのか、そして、地域愛着を醸成するための効果的な地域資源の触れ合い方は何かを明確にするために、伊東や藪谷らの論文で用いている質問項目を使用する。本研究では、「地域愛着」を「選好」、「感情」、「持続願望」の3要素に分類し、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の5段階での回答を求めた。

④高校生が思う地域資源について

地域愛着、そして定住意識が醸成される効果的な地域資源接触があるのか、高校生の生活環境などによって違いがあるのか、澤本や伊東らの研究の質問項目を使用する。本研究では、大野市にある地域資源を「自然」に着目した。

次に、その地域資源との接触のシチュエーションを高校生ならではの場面に変えて、“学校行事や課外活動で大野の自然を感じられる場所に訪れたことがある(遠足など)”のように「物事との接触要素」を含んだ自然接触の場合、“友人や恋人とよく大野の自然を感じられる場所で遊んだ思い出がある”のように「人との接触要素」を含んだ自然接触の場合、“観光客やマスコミ、ネット等でよい評判を聞くと嬉しく思う”のような「外部との接触要素」を含んだ自然接触の場合の3つのパターンに分類し、これらの質問に対して、「とてもそう思う」から「全然そう思わない」の5段階での回答を求めた。

2) アンケートの質問内容

a) 「②定住意識に関して」の質問内容

a-1) 進学先や就職先等は考えないうえで、高校卒業後や大学・短大・専門学校等を卒業後も、大野市に住みたいと思うかについて(大野市内に住みたい／何年か市外に住んだらその後大野市に住みたい／福井県内のどこかで住みたい／福井県外のどこかで住みたい)の中で、該当するもの1つ回答してもらう。

a-2) 一時的にもしくは外部に出たいと回答した人で、大野市外に住んでいる間も大野市と関わり続けたいと思うか(地域イベントには参加したい・市から何か頼まれると手伝いたい・市が災害にあったら支援したい等)について(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つに回答してもらう。

b) 「③地域愛着に関して」の質問内容

地域愛着(選好) : 大野市が好きだ/雰囲気や土地柄が気に入っている

地域愛着(感情) : ずっと住み続けたい/自分の“まち”だという感じがする

地域愛着(持続願望) : いつまでも変わってほしくないものがある/無くなってしまうと悲しいものがある

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つ回答してもらう。

c) 「③高校生が想う地域資源に関して」の質問内容

物事 : 学校行事や課外活動で大野の自然を感じられる場所に訪れたことがある(遠足など)/学校以外で自然について考える機会があった。

人 : 家族や近所の人とよく大野の自然について話をする/友人や恋人とよく大野の自然を感じられる場所で遊んだ思い出がある。

外部 : 観光客やマスコミ、ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う/市にこの資源があることを誇りに思う。

(とてもそう思う/そう思う/どちらでもない/そう思わない/全然そう思わない)で、該当するもの1つ回答してもらう。

3) 受動的、能動的アプローチ、比較分析について

a) 受動的アプローチ

地域に対する課題、魅力などを高校生が一方的に聞いた際の地域愛着意識について分析をする。研究対象地である福井県大野市にある福井県立大野高等学校の生徒一人ひとりが自分の学習状況に応じて、自分が学習した内容を選んで活動できる時間である「D-time」を受動的アプローチと位置付ける。

D-time : 学習ソフトや希望制講座など、多様な学びの選択肢を提供し、何が必要か、何をすべきか、生徒に選択肢を与え、自走できる子は見守り、自走できない子は適切な支援を行う。目的は4つあり、以下に示す。

- ・希望制講座を通して、自らのキャリアについて考える機会を提供し、学習意欲を育んだり、学習意義を発見させたりする。
- ・学習ソフトを活用して、到達度に即した自主学習を行える環境を整備し、学習習慣や基礎的・応用的学力の定義を図る。

- ・「総合的な探究の時間」をさらに深める活動時間を確保し、自ら課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- ・課外活動にチャレンジするための活動時間を確保し、各種検定や各種コンテストへの挑戦を通して、自身の可能性を広げる。

b) 能動的アプローチ

地域に対する課題、魅力などを高校生同士が自由に議論し、考えた際の地域愛着意識について分析を行う。研究対象地である福井県大野市にある福井県立大野高等学校の総合学習の一環である「わたしが未来の市長プロジェクト」を能動的アプローチと位置付ける。以下に「わたしが未来の市長プロジェクト」について説明する。

わたしが未来の市長プロジェクト：クラスによって「子ども・健幸福祉」、「地域づくり」、「くらし環境」、「地域経済」の4つのテーマがあり、そのテーマに沿って数班に分かれ、大野市の課題を発見し、改善できるような具体的な計画を高校生自身が考える。学内選考があり、選ばれた計画を大野市長に提案する。また、実際に高校生の提案したプロジェクトを翌年度に実現していくことを前提に進めた実績がある。

c) 比較分析

具体的な活動案提案に向けて受動的アプローチと能動的アプローチによって構築した地域愛着意識モデルを比較考察する。地域愛着や定住意識の醸成において有効な接触方法や取組について明らかにする。

第3章 受動的アプローチによる地域愛着醸成分析

アンケート詳細について表 3-1-1 に示す。調査期間は 2023 年 9 月 25 日とし、総配布数は 114 通であった。結果、サンプル数は 107 であり、回答率は 100%であった。また、有効回答数は 104 もの数であり、有効回答率は 97.2%と高い回収率とすることができた。

表 3-1-1 アンケート詳細

研究対象	福井県立大野高等学校の 大野出身の高校 1 年生
実施期間	2023 年 9 月 25 日
総配布数	114⇒107
サンプル数	107(回答率 100.0%)
有効回答数	104(有効回答率 97.2%)

(1) 現段階の住み予定の集計結果

現段階における高校卒業後の住む予定を把握し、属性を確認するために集計を行った。図 3-1-1 と図 3-1-2 に結果を示す。

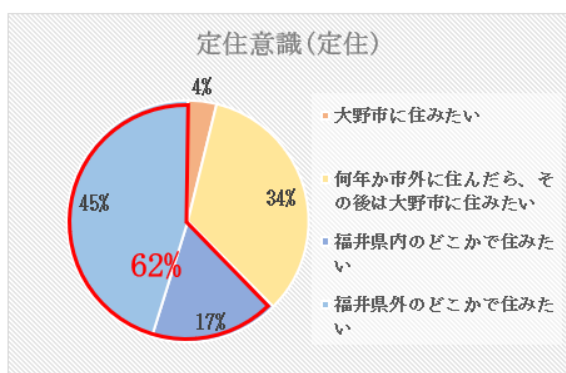


図 3-1-1 定住意識(定住)

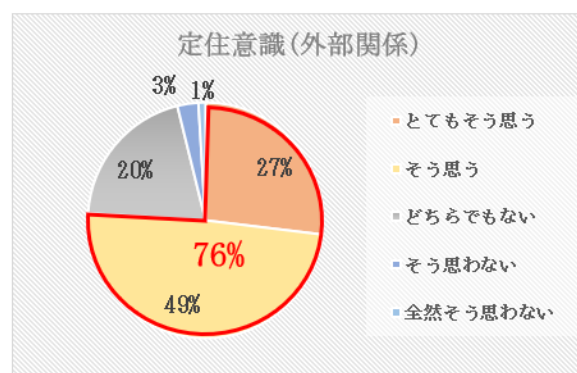


図 3-1-2 定住意識(外部関係)

定住意識の定住に関しては、「就職先・進学先等は考えずに、高校卒業後、あるいは大学・短大・専門学校等を卒業後も、大野市に住みたいと思いますか。」というような質問をしている。高校生の回答から「福井県外のどこかで住みたい」、「福井県内のどこかで住みたい」を合わせて 62%であり、現段階で「大野市外に住みたい」と感じている高校生の割合が多いということがわかった。

定住意識の外部関係に関しては、「大野市内や市外に住んでいる間も、大野市と関わり続けたいと

思いますか。」というような質問をしている。高校生の回答から「とてもそう思う」「そう思う」合わせて 76%であり、外部からの関係を持ち続けたいと感じている割合が多いということがわかった。

(2) 自然接触と地域愛着の関係

受動的アプローチによる地域愛着意識モデルの作成を目指し、自然接触と地域愛着の関係について分析を行う。

1) 単純集計(クロス集計)

単純集計による結果を図 3-2-1 に示す。各接触機会(物事/人/外部)が多い高校生と少ない高校生の地域愛着についてである。地域愛着度合いは、アンケートにより 5 段階評価で尋ねており、5～1 点をつけた平均値である。各接触機会も同様に計算している。その平均値より大きい人を接触機会が多い、少ない人を接触機会が少ないとしている。

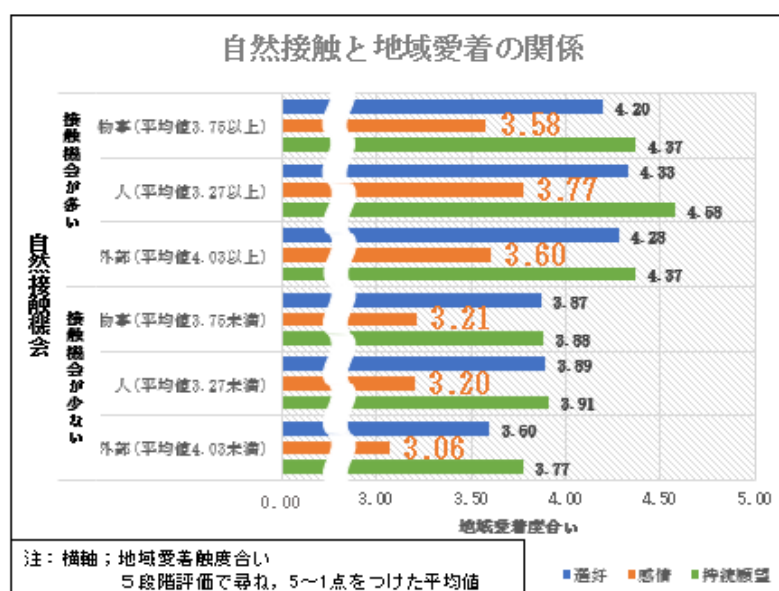


図 3-2-1 自然接触と地域愛着の関係

この結果、自然接触機会が多い高校生の方が少ない高校生に比べて地域愛着度合いが高いことがわかった。また、図中オレンジ色で示す地域愛着(感情)における地域愛着度合いは、どの接触機会のにおいても他の地域愛着(選好/持続願望)に比べて低いということが分かった。地域愛着(感情)については、自然接触では比較的醸成させにくいと考えられる。

なお、統計的に差があるかを確認するため、t 検定を行った。なお、t 検定に入る前に、2 標本を使った分散の検定分析である F 検定も行い、等分散を仮定している。

差の検定結果は、表 3-2-1 の通りであり、5%水準で有意であるとの結論を得ている。

表 3-2-1 平均値の差の検定(選好, 感情)

		物事	人	外部
P 値	接触機会が多い	3.62×10^{-07}	5.05×10^{-05}	3.05×10^{-09}
	接触機会が少ない	1.66×10^{-05}	1.97×10^{-08}	9.63×10^{-05}

また、図 3-2-1 より接触機会が多い人と少ない人の間で地域愛着(感情)に差が出たことから、平均値の差の検定を行った。その結果が表 3-2-2 である。

表 3-2-2 平均値の差の検定(接触機会が多い, 少ない)

	物事	人	外部
P 値	0.01	8.95×10^{-06}	2.36×10^{-05}

2) 数量化 I 類

数量化 I 類による結果を表 3-2-3 に示す。外部との接触は地域愛着(選考/感情/持続願望)すべてに影響があることがわかった。人との接触は地域愛着(感情)に影響があることがわかった。

表 3-2-3 数量化 I 類結果

地域愛着(選好)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：1.18E-08 重決定R2：0.30			
	係数	標準誤差	P値
切片	1.81	0.35	1.22E-06
観光客やマスコミ、ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う	0.26	0.09	4.62E-03
市にこの資源(自然)があることを誇りに思う	0.25	0.1	0.02
地域愛着(感情)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：9.03E-08 重決定R2：0.27			
	係数	標準誤差	P値
切片	1.72	0.32	5.50E-07
家族や近所の人とよく自然について話をする	0.21	0.06	2.67E-04
観光客やマスコミ、ネット等で良い評判を聞くと嬉しく思う	0.25	0.07	1.29E-03
地域愛着(持続願望)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：8.68E-08 重決定R2：0.25			
	係数	標準誤差	P値
切片	2.01	0.38	7.97E-07
市にこの資源(自然)があることを誇りに思う	0.49	0.08	8.68E-08

3) 共分散構造分析

共分散構造分析による結果を図 3-2-2、表 3-2-4 に示す。人との接触要素を含んだ自然接触から外部との接触要素を含んだ自然接触に直接効果が見られた。外部との接触要素を含んだ自然接触では、地域愛着(選好)に直接効果が見られた。また、地域愛着(感情/持続願望)に間接効果が見られた。外部との接触要素を含んだ自然接触がこのように直接効果や間接効果が見られた要因として、受動的アプローチである D-time の講演の内容の関西大学の研究拠点である横町スタジオでの活動などによる大野市の評価といったことなどが影響したと考えられる。

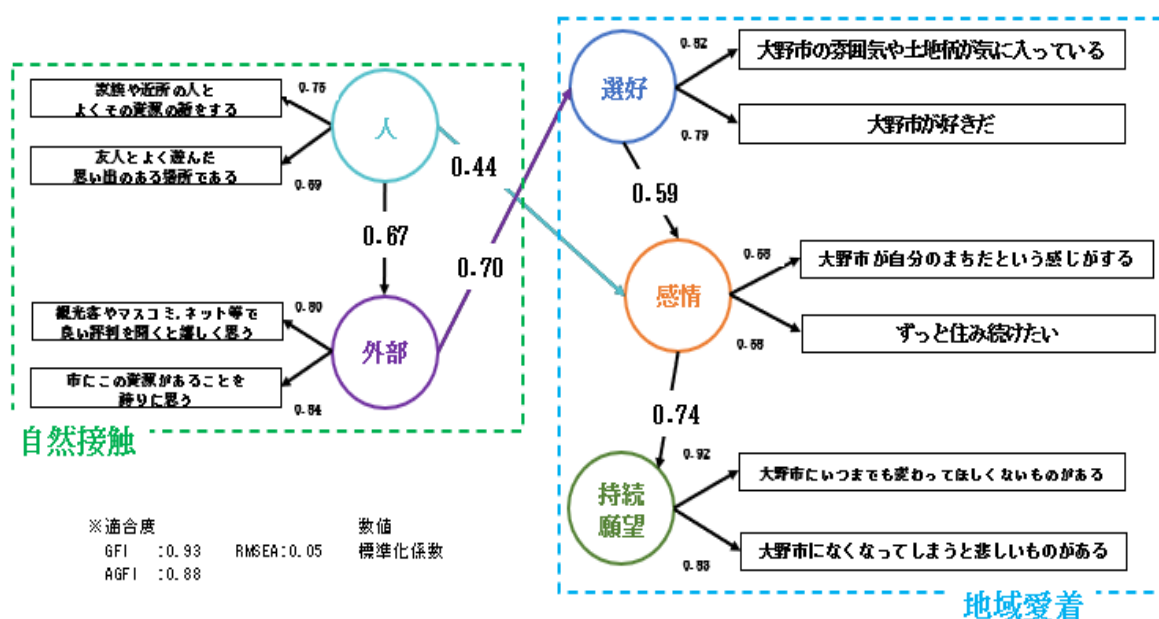


図 3-2-2 共分散構造分析(自然接触と地域愛着)

表 3-2-4 間接効果(自然接触と地域愛着)

	外部	選好	感情	持続願望
人	0.00	0.47	0.28	0.53
外部		0.00	0.41	0.31
選好	0.00		0.00	0.44

(3) 地域愛着と定住意識の関係

受動的アプローチによる地域愛着意識モデルの作成を目指し、地域愛着と定住意識の関係について分析を行う。

1) 単純集計(クロス集計)

単純集計による結果を図 3-3-1、図 3-3-2 に示す。両図の縦軸は、図中に示す定住意識に関する各質問に対する回答内容である。図 3-3-1 の縦軸の「福井県外のどこかで住みたい」より「大野市に住みたい」の方が、定住意識が高く、図 3-3-2 でも質問に対して、「全然そう思わない」より「とてもそう思う」の方が、定住意識が高いと判断している。図にしめすように、定住意識が高い人ほど地域愛着度合いが高いことがわかった。これにより、地域愛着(選考/感情/持続願望)と定住意識(定住/外部関係)の間で相関関係が示唆されることがわかった。

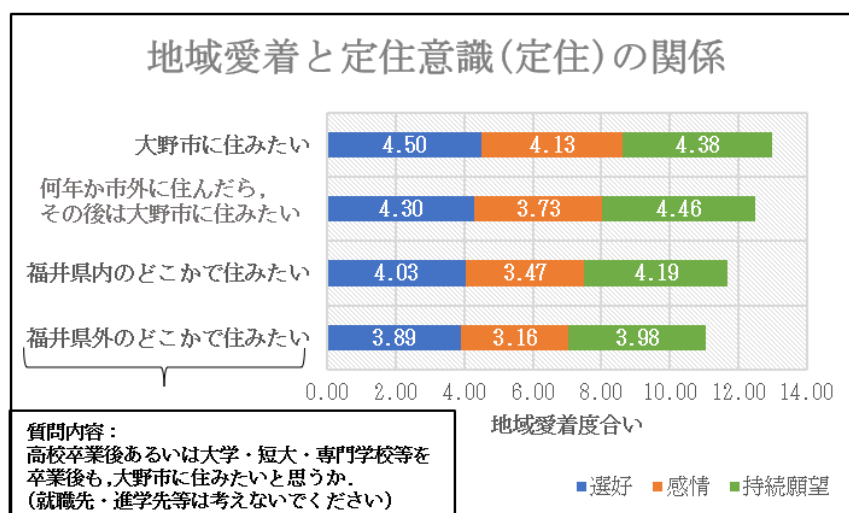


図 3-3-1 地域愛着と定住意識(定住)の関係

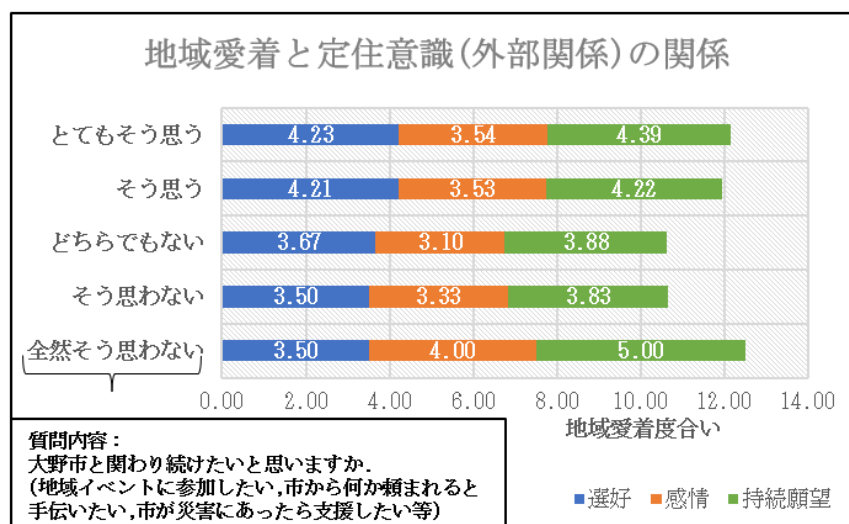


図 3-3-2 地域愛着と定住意識(外部関係)の関係

図 3-3-1, 3-3-2 の有意差を確認するため、単純集計(クロス集計)と同様に平均値の差の検定を行った。図 3-3-1 では「大野市に住みたい」と「福井県外のどこかで住みたい」の間の差、図 3-3-2 では「とてもそう思う」と「そう思わない」の間の差で平均値の差の検定を行った。その結果を表 3-3-1, 表 3-3-2 に示す。

表 3-3-1 平均値の差の検定

(大野市に住みたい, 福井県外のどこかで住みたい)

	選好	感情	持続願望
P 値	0.07	0.01	0.31

表 3-3-2 平均値の差の検定

(とてもそう思う, そう思わない)

	選好	感情	持続願望
P 値	0.07	0.01	0.31

2) 数量化 I 類

数量化 I 類による結果を表 3-3-3 に示す。定住意識(定住/外部関係)に影響している地域愛着(選好/感情/持続願望)を確認するため、分析を行った。

結果、地域愛着(感情)が定住意識(定住)の醸成に影響があることがわかった。また、地域愛着(選好)が定住意識(外部関係)の醸成に影響があることがわかった。

表 3-3-3 数量化 I 類結果

地域愛着(選好/感情/持続願望)と定住意識(定住)の関係			
数量化 I 類 有意水準: $p < 0.05$ 有意 F: $7.07E-07$ 重決定 R^2 : 0.33			
	係数	標準誤差	P 値
切片	0.36	0.30	$2.30E-01$
ずっと住みたい又は住みたい	0.52	0.09	$2.60E-07$
地域愛着(選好/感情/持続願望)と定住意識(外部関係)の関係			
数量化 I 類 有意水準: $p < 0.05$ 有意 F: $6.10E-05$ 重決定 R^2 : 0.34			
	係数	標準誤差	P 値
切片	1.91	0.53	$4.87E-04$
大野市が好きだ	0.37	0.12	$2.29E-03$

3) 共分散構造分析

共分散構造分析による結果を図 3-3-3, 表 3-3-4, 3-3-5 に示す。地域愛着(感情)から定住意識(定住)に直接効果が見られた。また、地域愛着(選好)からは間接効果が見られた。地域愛着(選好)から定住意識(外部関係)に直接効果が見られた。地域愛着(選考)が定住意識(定住/外部関係)どちらにも直接効果または間接効果が確認された。地域愛着(選考)が定住意識醸成において大きく影響があると考えらる。

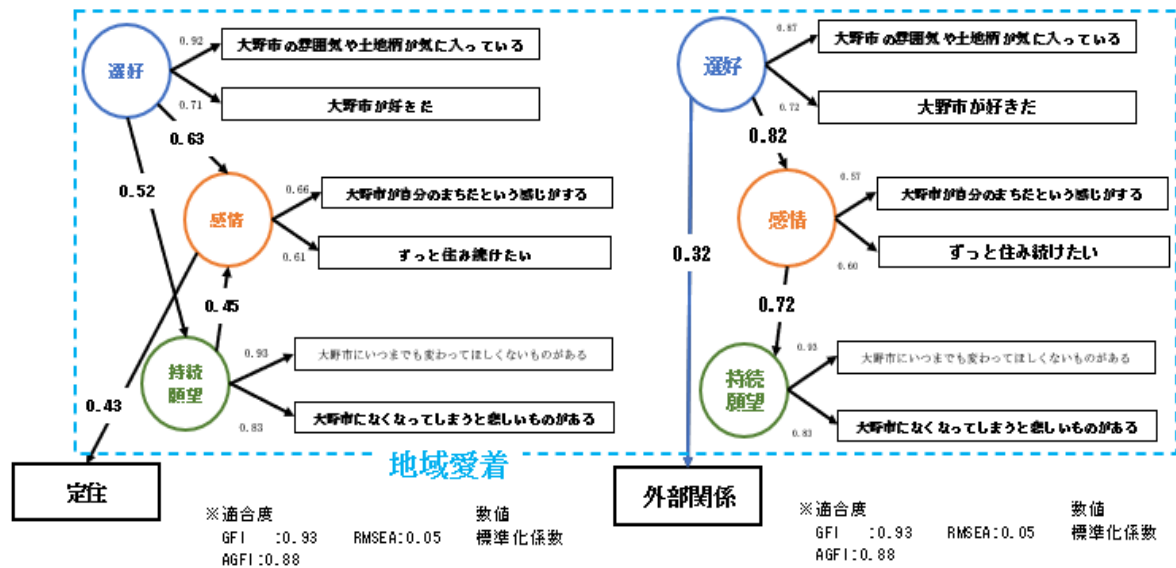


図 3-3-3 共分散構造分析(地域愛着と定住意識)

表 3-3-4 間接効果(定住)

	感情	持続願望	定住
選好	0.23	0.00	0.37
感情		0.00	0.00
持続願望	0.00		0.19

表 3-3-5 間接効果(外部関係)

	感情	持続願望	外部関係
選好	0.00	0.59	0.00
感情		0.00	0.00
持続願望	0.00		0.00

(4) 自然接触と地域愛着, 定住意識の関係

図 3-4-1, 表 3-4-1 に自然接触と地域愛着, 定住意識の関係について結果を示す. 人との接触要素を含んだ自然接触から外部との接触要素を含んだ自然接触に直接効果が見られた. 外部との接触要素を含んだ自然接触では, 地域愛着(選考)に直接効果が見られた. また, 地域愛着(感情/持続願望)に間接効果が見られました. メディアや県外大学生などといった外部との接触要素を含んだ自然接触が地域愛着や定住意識の醸成への影響度が高いことがわかった.

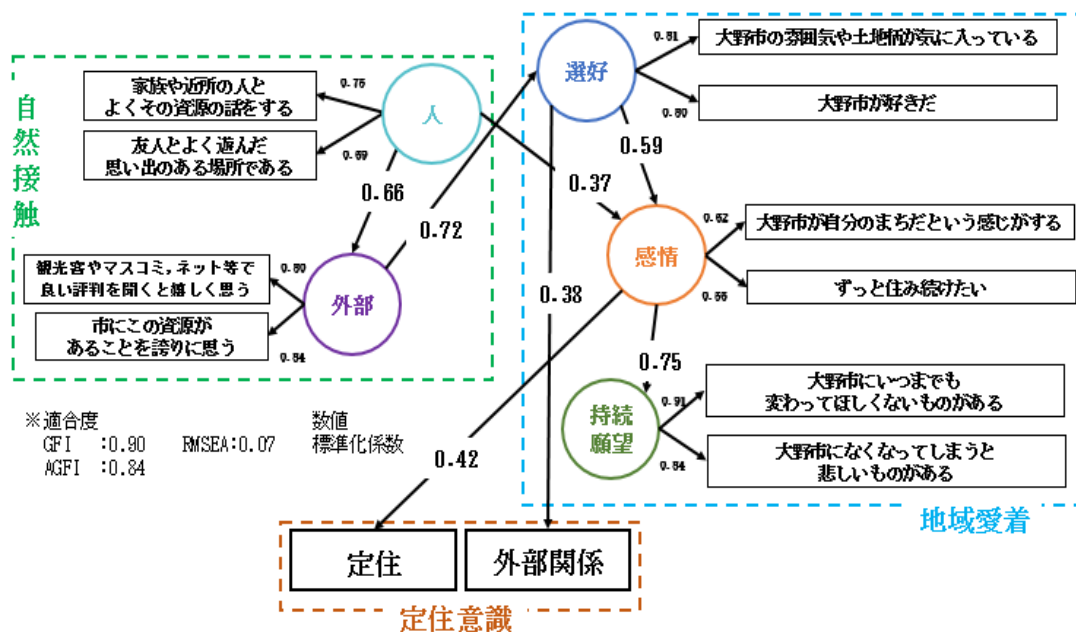


図 3-4-1 地域愛着意識モデル(受動的アプローチ)

表 3-4-1 間接効果(受動的アプローチ)

	外部	選好	感情	持続願望	外部関係	定住
人	0.00	0.48	0.28	0.49	0.18	0.27
外部		0.00	0.42	0.32	0.27	0.18
選好	0.00		0.00	0.45	0.00	0.25

第4章 能動的アプローチによる地域愛着醸成分析

アンケート詳細について表 4-1-1 に示す。調査期間は 2021 年 12 月 15 日 2021 年～12 月 16 日とし、総配布数は 115 通であった。本研究では、自然との接触に着目したため、高校生が想う地域資源を自然と回答した高校生を対象とした。結果、サンプル数は 64 であり、回答率は 100%であった。また、有効回答数は 63 であり、有効回答率は 98.4%と高い回収率とすることができた。

表 4-1-1 アンケート詳細

対 象	福井県立大野高等学校の 大野出身の高校 1 年生
実施期間	2021 年 12 月 15 日～ 2021 年 12 月 16 日
総配布数	115⇒64
サンプル数	64(回答率 100.0%)
有効回答数	63(有効回答率 98.4%)

(1) 現段階の住み予定の集計結果

現段階における高校卒業後の住む予定を把握し、属性を確認するために集計を行った。図 4-1-1 と図 4-1-2 に結果を示す。

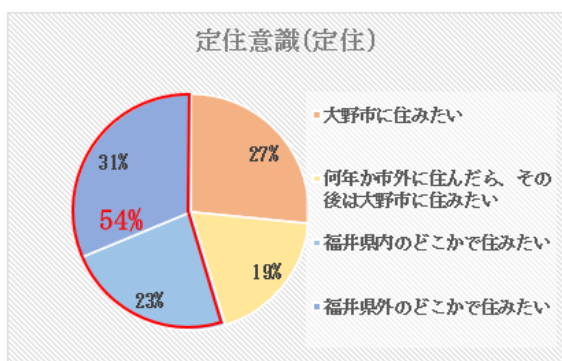


図 4-1-1 定住意識(定住)

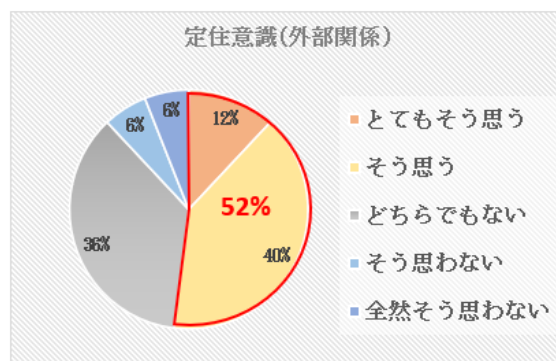


図 4-1-2 定住意識(外部関係)

定住意識の定住に関しては、「就職先・進学先等は考えずに、高校卒業後、あるいは大学・短大・専門学校等を卒業後も、大野市に住みたいと思いますか。」というような質問をしている。高校生の回答から「福井県外のどこかで住みたい」、「福井県内のどこかで住みたい」合わせて 54%であり、

現段階で「大野市外に住みたい」と感じている高校生の割合が多いということがわかった。

定住意識の外部関係に関しては、「大野市内や市外に住んでいる間も、大野市と関わり続けたいと思いますか。」というような質問をしている。高校生の回答から「とてもそう思う」、「そう思う」合わせて52%であり、外部からの関係を持ち続けたいと感じている割合が多いということがわかった。

(2) 自然接触と地域愛着の関係

能動的アプローチによる地域愛着意識モデルの作成を目指し、自然接触と地域愛着の関係について分析を行う。

1) 単純集計(クロス集計)

単純集計による結果を図4-2-1に示す。数値の扱いは、前節と同様である。

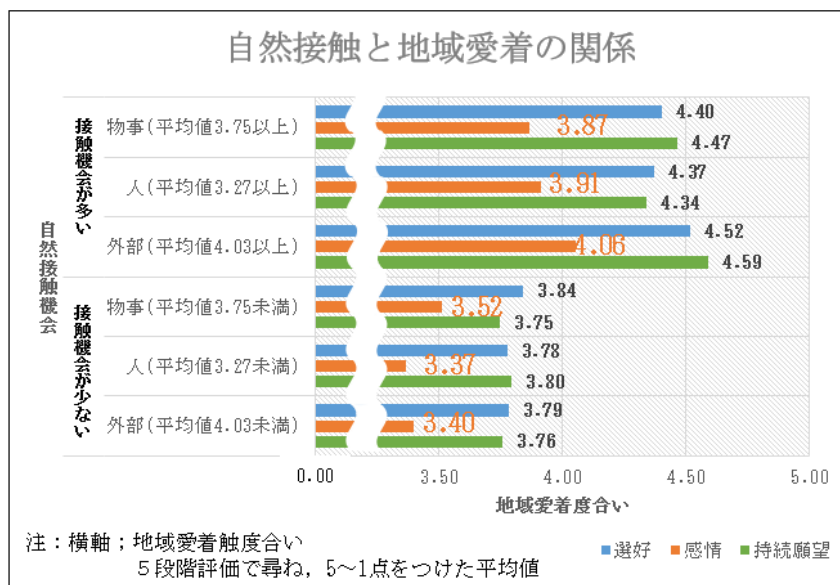


図 4-2-1 自然接触と地域愛着の関係

この結果、受動的アプローチと同様に、自然接触機会が多い高校生の方が少ない高校生に比べて地域愛着度合いが高いことがわかった。また、図中オレンジ色で示す地域愛着(感情)における地域愛着度合いは、どの接触機会においても他の地域愛着(選好/持続願望)に比べて低いということも同様であった。地域愛着(感情)については、自然接触では比較的醸成させにくいと考えられる。

なお、統計的に差があるかを確認するため、t検定も行っている。t検定に入る前に、2標本を使った分散の検定分析であるF検定も行い、等分散を仮定している。

差の検定結果は、表4-2-1の通りであり、接触機会が多いケースについては、5%水準で有意であ

るとの結論を得ている一方で、接触機会が少ない場合は、差が有意ではない。

表 4-2-1 平均値の差の検定(選好, 感情)

		物事	人	外部
P 値	接触機会が多い	7.14×10^{-04}	3.09×10^{-03}	1.11×10^{-02}
	接触機会が少ない	0.19	0.14	0.07

また、図 4-2-1 より接触機会が多い人と少ない人の間で地域愛着(感情)に差が出たことから、平均値の差の検定を行った。その結果が表 4-2-2 である。人および外部のケースでは、5%水準で有意な差があり、物事については有意ではなかった。

表 4-2-2 平均値の差の検定(接触機会が多い, 少ない)

	物事	人	外部
P 値	0.10	0.02	2.11×10^{-03}

2) 数量化 I 類

数量化 I 類による結果を表 4-2-3 に示す。外部との接触は地域愛着(選考/感情/持続願望)すべてに影響があることがわかった。人との接触は地域愛着(感情)に影響があることがわかった。

表 4-2-3 数量化 I 類結果

地域愛着(選好)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：2.24E-13 重決定R2：0.59			
	係数	標準誤差	P値
切片	1.39	0.30	1.97E-05
市にこの資源(自然)があることを誇りに思う	0.67	0.07	2.24E-13
地域愛着(感情)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：1.60E-09 重決定R2：0.49			
	係数	標準誤差	P値
切片	1.02	0.36	6.01E-03
友人とよく遊んだ思い出のある場所	0.20	0.07	5.48E-03
市にこの資源(自然)があることを誇りに思う	0.47	0.09	1.85E-06
地域愛着(持続願望)			
数量化I類 有意水準：p<0.05 有意F：4.80E-15 重決定R2：0.64			
	係数	標準誤差	P値
切片	1.22	0.29	6.69E-05
市にこの資源(自然)があることを誇りに思う	0.70	0.07	4.80E-15

3) 共分散構造分析

共分散構造分析による結果を図 4-2-2, 表 4-2-4 に示す. 自然接触から地域愛着(選好/持続願望)に直接効果が見られた. また, 地域愛着(感情)に間接効果が見られた. 数量化 I 類の分析結果より, 外部との接触要素を含んだ自然接触が有効であると示唆される. これは, 高校生にとって能動的アプローチを行った高校生は探究活動で大野市の魅力や課題を自ら調べていることから外部評価などが影響したと考えられる.

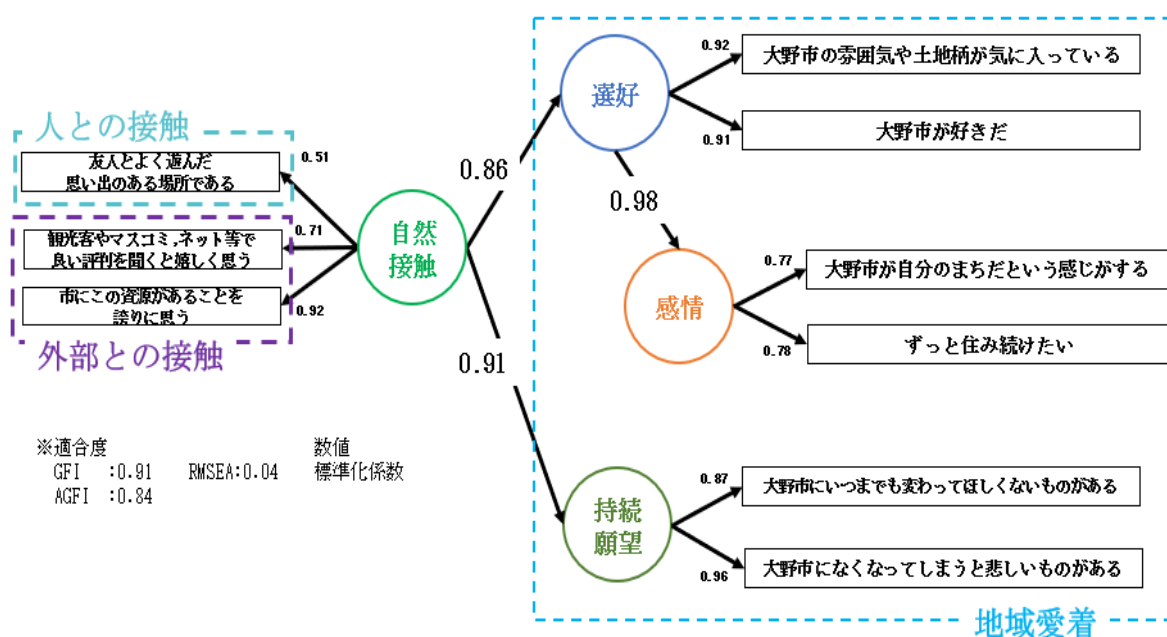


図 4-2-2 共分散構造分析(自然接触と地域愛着)

表 4-2-4 間接効果(自然接触と地域愛着)

	選好	感情	持続願望
自然接触	0.00	0.00	0.85

(3) 地域愛着と定住意識の関係

能動的アプローチによる地域愛着意識モデルの作成を目指し, 地域愛着と定住意識の関係について分析を行う.

1) 単純集計(クロス集計)

単純集計による結果を図 4-3-1, 図 4-3-2 に示す. 両図の縦軸は, 図中に示す定住意識に関する質問に対する回答内容である. 図 4-3-1 の縦軸の「福井県外のどこかで住みたい」より「大野市に

住みたい」の方が、定住意識が高いと判断し、図 4-3-2 でも質問に対して、「全然そう思わない」より「とてもそう思う」の方が、定住意識が高いと判断している。

これらの図より、定住意識が高い人ほど地域愛着度合いが高いことがわかった。地域愛着(選考/感情/持続願望)と定住意識(定住/外部関係)の間で相関関係が示唆されることがわかった。

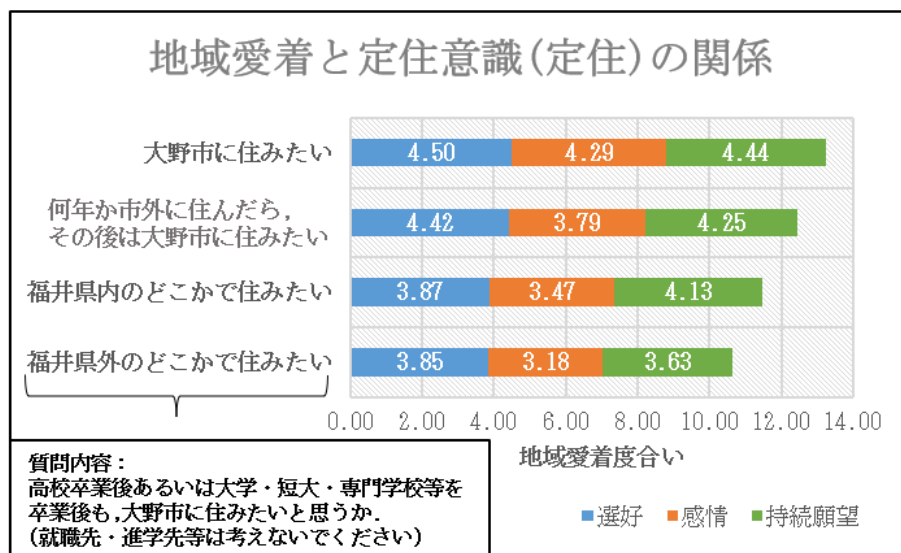


図 4-3-1 地域愛着と定住意識(定住)の関係

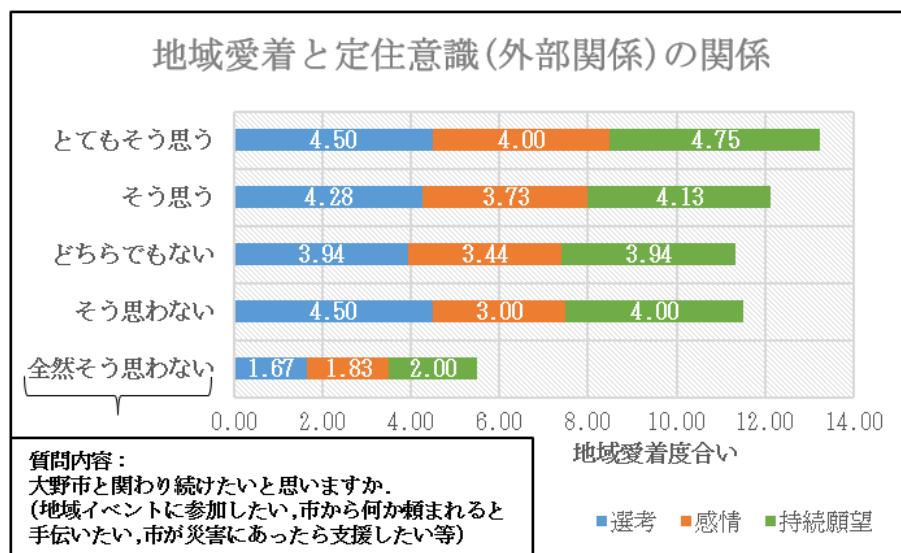


図 4-3-2 地域愛着と定住意識(外部関係)の関係

図 4-3-1, 4-3-2 の有意差を確認するため、単純集計(クロス集計)と同様に平均値の差の検定を

行った。図 4-3-1 では「大野市に住みたい」と「福井県外のどこかで住みたい」の間の差、図 4-3-1 では「とてもそう思う」と「そう思わない」の間の差で平均値の差の検定を行った。その結果を表 4-3-1、表 4-3-2 に示す。表 4-3-1 中の選好を除き、有意な差であるとの結果を得た。

表 4-3-1 平均値の差の検定
(大野市に住みたい，福井県外のどこかで住みたい)

	選好	感情	持続願望
P 値	0.15	0.03	0.02

表 4-3-2 平均値の差の検定
(とてもそう思う，そう思わない)

	選好	感情	持続願望
P 値	5.66×10^{-04}	0.02	0.03

2) 数量化 I 類

数量化 I 類による結果を表 4-3-3 に示す。定住意識(定住/外部関係)に影響している地域愛着(選好/感情/持続願望)を確認するため、分析を行った。

結果、地域愛着(感情)が定住意識(定住)の醸成に影響があることがわかった。また、地域愛着(選好/持続願望)が定住意識(外部関係)の醸成に影響があることがわかった。

表 4-3-3 数量化 I 類結果

地域愛着(選好/感情/持続願望)と定住意識(定住)の関係			
数量化 I 類 有意水準：p<0.05 有意F：7.07E-07 重決定R2：0.33			
	係数	標準誤差	P値
切片	0.15	0.43	0.73
ずっと住み続けたい又は住みたい	0.68	0.12	7.07E-07
地域愛着(選好/感情/持続願望)と定住意識(外部関係)の関係			
数量化 I 類 有意水準：p<0.05 有意F：6.10E-05 重決定R2：0.34			
	係数	標準誤差	P値
切片	0.51	0.61	0.41
大野市が好きだ	0.41	0.17	0.02
何時までも変わってほしくないものがある	0.33	0.16	0.04

3) 共分散構造分析

共分散構造分析による結果を図 4-3-3、表 4-3-4、4-3-5 に示す。地域愛着(感情)から定住意識(定

住)に直接効果が見られた。また、地域愛着(選好)からは間接効果が見られた。地域愛着(選好)から定住意識(外部関係)に直接効果が見られた。地域愛着(選考)が定住意識(定住/外部関係)どちらにも直接効果または間接効果が確認された。地域愛着(選考)が定住意識醸成において大きく影響があると考えられる。

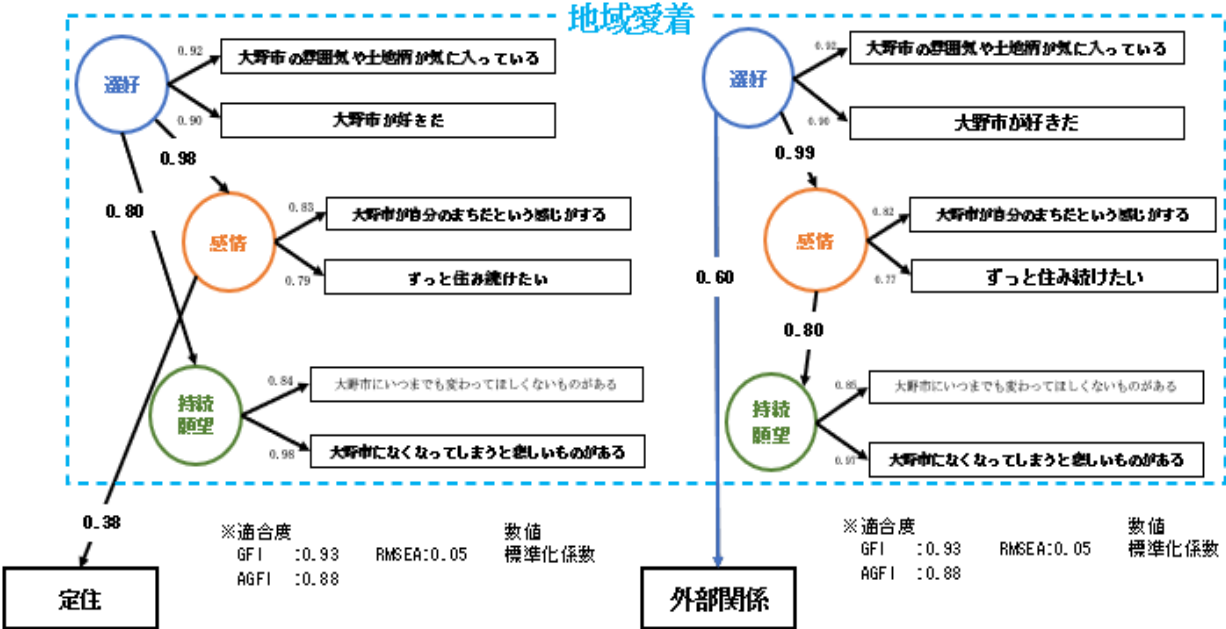


図 5-3-3 共分散構造分析(地域愛着と定住意識)

表 4-3-4 間接効果(定住)

	感情	持続願望	定住
選好	0.00	0.00	0.38

表 4-3-4 間接効果(外部関係)

	感情	持続願望	外部関係
選好	0.00	0.80	0.00

(4) 自然接触と地域愛着、定住意識の関係

図 4-4-1、表 4-4-1 に自然接触と地域愛着、定住意識の関係について結果を示す。自然接触から地域愛着に直接効果が見られた。また、自然接触から定住意識(定住/外部関係)に間接効果が見られた。数量化Ⅰ類の分析結果より、定住意識(定住)には友人との思い出が影響することがわかる。また、定住意識(外部関係)にはメディアや県外大学生の評価が影響することがわかる。

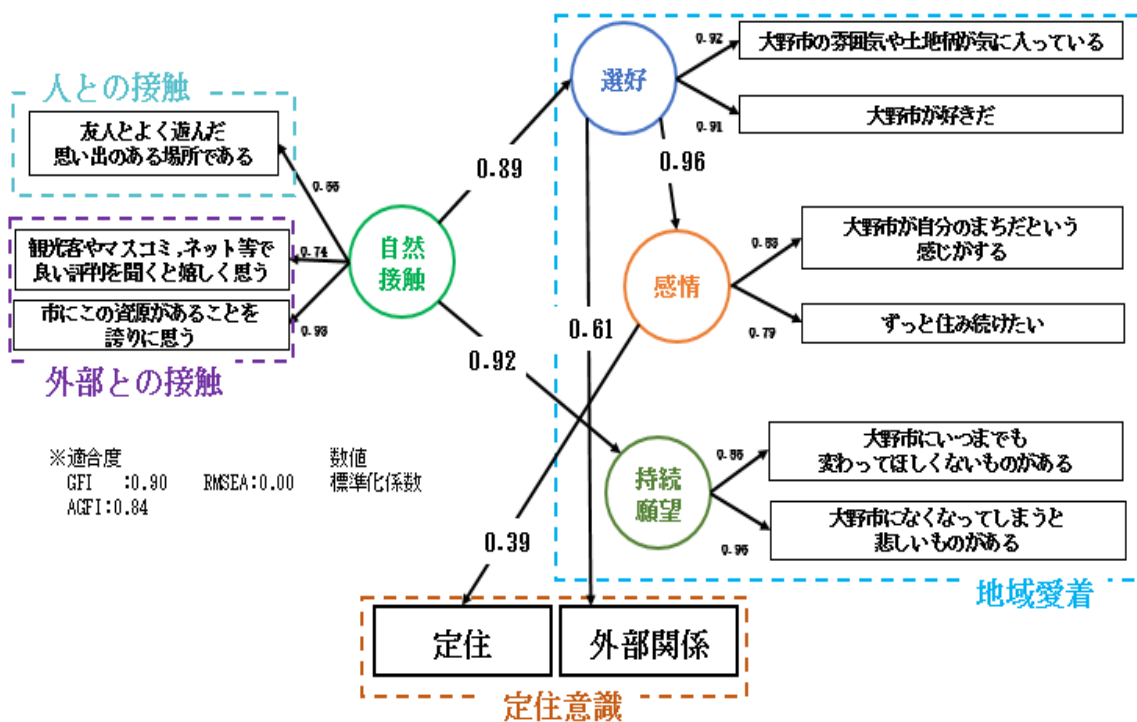


図 4-4-1 地域愛着意識モデル(受動的アプローチ)

表 4-4-1 間接効果(受動的アプローチ)

	選好	持続願望	感情	定住	外部関係
自然接触	0.00	0.00	0.86	0.33	0.55
選好		0.00	0.00	0.37	0.00

第5章 受動的・能動的アプローチによる地域愛着醸成分析の比較考察

(1) 自然接触と地域愛着、定住意識間の影響度の比較

本研究は、受動的・能動的アプローチどちらも Step1「自然接触と地域愛着」、Step2「地域愛着と定住意識」、Step3「自然接触と地域愛着、定住意識」の関係について分析をした。分析結果をもとに地域愛着や定住意識の醸成により有効な自然接触の接触方法について明らかにする。自然接触が地域愛着や定住意識に与える共分散構造分析での直接効果や間接効果でそれぞれ比較分析を行う。表 5-1 に受動的・能動的アプローチの比較結果を示す。

表 5-1 受動的・能動的アプローチ比較表

	受動的アプローチ	能動的アプローチ
Step1 自然接触による 地域愛着醸成の プロセス (数値：標準化係数)	直接効果 人との接触 ⇒外部との接触 : 0.67 感情 : 0.44 外部との接触⇒選好 : 0.70	直接効果 自然接触⇒選好 : 0.86 持続願望 : 0.91
	間接効果 人との接触 ⇒選好 : 0.47 感情 : 0.28 持続願望 : 0.53 外部との接触⇒感情 : 0.41 持続願望 : 0.31	間接効果 自然接触⇒感情 : 0.85
Step2 地域愛着による 定住意識醸成の プロセス (数値：標準化係数)	直接効果 感情 ⇒定住 : 0.43 選好 ⇒外部関係 : 0.32	直接効果 感情 ⇒定住 : 0.43 選好 ⇒外部関係 : 0.32
	間接効果 選好 ⇒定住 : 0.37	間接効果 選好 ⇒定住 : 0.37
Step3 自然接触による 定住意識醸成の プロセス (数値：標準化係数)	直接効果 感情 ⇒定住 : 0.43 選好 ⇒外部関係 : 0.32	直接効果 感情 ⇒定住 : 0.43 選好 ⇒外部関係 : 0.32
	間接効果 人との接触 ⇒定住 : 0.27 外部との接触⇒定住 : 0.18 選好 ⇒定住 : 0.25 人との接触 ⇒外部関係 : 0.18 外部との接触⇒外部関係 : 0.27	間接効果 自然接触⇒定住 : 0.33 自然接触⇒感情 : 0.86 選好 ⇒定住 : 0.37 自然接触⇒外部関係 : 0.55

Step1 の自然接触と地域愛着の関係では、自然接触から地域愛着(選好)への直接効果で受動アプローチが 0.70、能動のアプローチが 0.86 であり、能動のアプローチの方が 0.16 高いことがわかった。また、自然接触から地域愛着(感情)への間接効果で受動的アプローチでは人との接触要素を含んだ自然接触では 0.28、外部との接触要素を含んだ自然接触では 0.41、能動のアプローチは 0.85 であり、能動のアプローチの方がそれぞれ 0.57、0.44 高いことがわかった。

Step2 と Step3、どちらも地域愛着(感情)から定住意識(定住)への直接効果による影響度で差は見られなかった。地域愛着(選好)から(外部関係)への直接効果による影響度ではそれぞれ 0.28 と 0.23 と差が見られた。

Step3 では、自然接触から定住意識(外部関係)への間接効果による影響度で差が出た。受動的アプローチでの人との接触要素を含んだ自然接触では 0.18、外部との接触要素を含んだ自然接触では 0.27、能動のアプローチでは 0.55 であり、それぞれ 0.37、0.23 能動のアプローチの方が高いことがわかった。

(2) まとめ

図 5-2 に共分散構造分析での直接効果や間接効果の比較結果について示す。

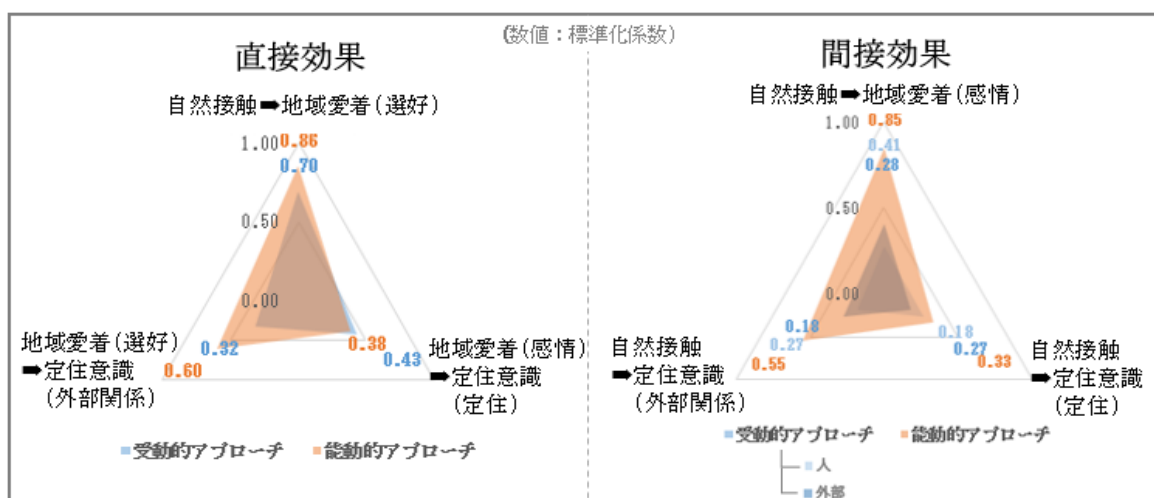


図 5-2 比較結果

地域愛着(感情)から定住への直接効果以外で能動のアプローチの方が、影響度が高いことがわかった。また、地域愛着(感情)から定住は受動的アプローチ、能動のアプローチどちらも影響度が低いことも確認できる。

これらのことより、以下の3点を結論づける。

- 定住意識(外部関係)の醸成には能動的アプローチが有効であると言える。また、人との接触や外部との接触要素を含めた自然接触を増加させることが定住意識(定住/外部関係)の醸成に効果的であると考えられる。
- 能動的アプローチは間接効果が受動的アプローチに比べて大きく得られた。
- 受動的アプローチと能動的アプローチ両方とも、“ずっと住み続けたい”などといった地域愛着(感情)から定住意識(定住)への直接効果が低いことがわかった。よって直接的すぎる効果に期待しすぎない方がいいと言える。

第6章 おわりに

(1) 本研究のまとめ

本研究では、福井県大野市を対象に地元から定住・転出の転機となる高校生に特化した地域愛着意識モデルを明らかにすることや大学がない市町村において有効な地域資源(自然)の接触方法や活動についてあきらかにするため、福井県立大野高等学校の高校1年生にアンケート調査を行った。アンケートの分析により、地域愛着意識モデルを受動的アプローチと能動的アプローチの2つのパターンで各々作成した。(図 3-4-1, 4-4-1)

これらのことより、地域愛着や定住意識の醸成のための自然接触の方法として、次のように述べることができる。

定住意識(定住)の醸成には、人との接触要素を含んだ自然接触や地域愛着(感情)が直接効果または間接効果が見られた。人との接触要素のなかでも友人や身近な人と大野市で有名な御清水とといった自然により主体的に関われる機会や仕組みを増やすことが重要であるということがわかった。定住意識(外部関係)の醸成には、外部との接触要素を含んだ自然接触や地域愛着(選好)が直接効果または間接効果が見られた。「わたしが未来の市長プロジェクト」などで、メディアや県外大学生などが定期的に評価または協働することが重要であるということがわかった。

(2) 今後の研究への展望

本研究を踏まえて、能動的アプローチでの地域愛着意識モデルの精度や具体的で有効な地域資源との接触方法に向けて以下の2点が挙げられる。

- ・本研究では、自然接触を“物事”，“人”，“外部”の3つの接触要素に分けて分析を行ったが、能動的アプローチにおいてデータ量が少ないことやデータに対して複雑すぎる可能性があり、3つの接触要素に分類し分析を行うことができなかった。能動的アプローチにおいても受動的アプローチと同様に3つの接触要素に分け、より具体性を持たせることが重要である。
- ・本研究において受動的アプローチと能動的アプローチとしたものは、福井県大野高等学校の総合学習などであり、学校内の活動によるものである。今後としては、より主体的または具体的な取り組みを明らかにするため、学校外での活動による受動的アプローチと能動的アプローチの評価を加えることが重要である。

(3) 提案

本研究の結果より、具体的な提案内容の一例を以下に示す。

・提案名

「ソーシャル・アントレナーシップで高校生と大学生が協働して取り組む」

・提案内容

関西大学社会連携部地域連携センターでは、学生がよりよい社会に向けて、自ら行動できるソーシャル・アントレプレナーシップ(社会企業家精神&行動様式)を育成するプログラムとして、2つのプロジェクトを2023年度にスタートさせた。その1つとして、地域コミュニティと連携して社会のリアルな課題解決にチャレンジする考動プロジェクトがある。上記のプロジェクトに参加する大学生と地元の高校生が協働して地域の課題解決を目指すという内容である。²⁰⁾

・2023年度の取り組み事例²¹⁾

対象地域：福井県大野市

課題：宿泊業と農業の協働による食と農のまちづくり

概要：地域外と地域をつなぐ宿泊業において大野で働く魅力を高めることは、観光のそれと同等の価値がある。来訪者と、“観光”だけでなく“働くこと”によってつながることができる存在になれるかが狙いであり、同時に大きな課題である。広大な農地が広がる大野市において、人口減や仕事の多様化、農耕機の高騰・更新の困難さがあるにも拘わらず担い手が不足するなどの問題に直面している。それらは、結果として、農業集落の空き家、遊休農地の増加、地産地消サイクルの障害など地域課題と直結していることが多い。地域課題解決の糸口をつかむため、農業の現状をより多くの人に触れるきっかけをつくるため2つのテーマを設ける。まずは「大野の野菜を食べる」ことである。大野の野菜・生産者を地域外へ繋ぐための新しい直売所のあり方の検討と開拓を行う。2つ目は「農業を生業としている人に関わる」ことである。就農体験で野菜づくりや土に触れることから始め、自然のサイクルに関わることが仕事であることを肌で感じてもらう。雪の多い大野では冬の閑散期の働き方が文化的にも新しい産業が生まれる起点ともなっており、その検討の価値もある。

本研究で、友人や身近な人または、メディアや県外大学生などと御清水や野菜といった大野の自然に触れることで地域愛着や定住意識を醸成できるということが分かった。そのことから上記

の提案内容でも、大野の自然に友人や県外大学生と触れ合えることができる。さらに、より大野の魅力を高校生に周知することができ、地域愛着や定住意識に大きな影響を与えることができる。また、活動した高校生を対象に本研究と同様に分析を行うことで、より具体的で有効な取り組みを明らかにすることができる。と考える。

参考文献

- 1) 総務省統計局：令和2年国勢調査, <https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka.html>, 2024年1月閲覧.
- 2) 定住自立圏構想研究会(2008)：定住自立圏構想研究会報告書～住みたいまちで暮らせる日本を～, 総務省.
- 3) 大野市公式ホームページ：<<https://www.city.ono.fukui.jp/>>2024年1月閲覧.
- 4) 李永俊, 杉浦裕晃 (2017)：地元回帰の決定要因とその促進策 -青森県弘前市の事例から-, 財務省財務総合政策研究所「フィナンシャル・レビュー」, 平成29年第3号(通巻第131号), pp. 123-143.
- 5) 辰野町 (2017)：移住定住に関する意識調査・アンケート集計結果.
- 6) Hidalgo, M. and Hernandez, B. (2001) "Place attachment : conceptual and empirical questions, Journal of Environmental Psychology", Vol. 21, pp. 273-281.
- 7) 武 基雄, 竹内寿一, 松井俊一(1982)：愛着性と定住性の研究：3-定住性の概念構成：都市計画, 日本建築学会学術講演梗概集. 計画系, pp. 2015-2016.
- 8) 武 基雄, 竹内寿一, 松井俊一(1982)：愛着性と定住性の研究：1-愛着性：都市計画, 日本建築学会大会学術講演梗概集. 計画系, pp. 2011-2012, WISE Living Lab HP, <http://sankaku-base.style/>.
- 9) 澤本凱智(2020)：地域資源接触と地域愛着からみた高校生の定住意識醸成のための関係性分析 -福井県大野市において-, 関西大学卒業論文.
- 10) 菊澤育代 近藤加代子(2019)：幸福度が定住意向に与える影響に関する研究～宗像市日の里地区を事例に～, 日本建築学会計画系論文集, 第84巻, 第755号, 129-136.
- 11) 鈴木春菜, 藤井聡(2008)：「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集D, 第64巻, 第2号, PP. 190-200.
- 12) 鈴木春菜, 藤井聡(2007)：「利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究」, 都市計画論文集, Vol42, No. 3, PP. 13-18.
- 13) 谷口綾子, 今井唯, 原文宏, 石田東生(2012)：「観光地における多様な主体の地域愛着の規定因に関する研究-ニセコ・倶知安地域を事例として」, 土木学会論文集D3, 第68巻, 第5号, PP. 551-562.
- 14) 藪谷祐介, 阿久井康平(2021)：「高校生の通学路における地域接触が地域愛着形成に与える影響—富山県小矢部市内の高校に通学する高校生を対象として」, 都市計画論文集, Vol. 56, No. 3, pp. 772-779.
- 15) Brown, G., Brown, B. and Perkins, D. (2004) "New housing as neighborhood revitalization—place attachment and confidence among residents—", Environmental and Behavior, Vol. 36, No. 6, pp. 749-775.
- 16) Brown, B., Perkins, D. and Brown, G. (2003) "Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis, " Journal of Environmental Psychology, Vol. 23, pp. 259-271.

- 17) 石盛真徳(2004) : 「コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加 : コミュニティ意識尺度の開発を通じて」, コミュニティ心理学研究, 第7巻, 第2号, PP. 87-98.
- 18) 鈴木春奈, 藤井聡(2008) : 「「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究」, 土木学会論文集 D, 第64巻, 第2号, pp. 179-189.
- 19) 福井県立大野高等学校 : [https://www. daiko. ed. jp/](https://www.daiko.ed.jp/), 2024 年1月閲覧.
- 20) 関西大学 : 関西大学ソーシャル・アントレプレナーシッププログラム, <https://www.kansai-u.ac.jp/renkei/SEJumco/index.html>, 2024 年2月閲覧
- 21) 関西大学 : 考動プロジェクト概要, https://www.kansai-u.ac.jp/renkei/SEJumco/2023_SEJumCo%20Program%20schedule.pdf, 2024 年2月閲覧